

(特研様式5)

所属長印

早稲田大学総長 殿

2008年 9月 30日

所 属 国際教養
資 格 教授
氏 名 三神 弘子 印

特 別 研 究 期 間 研 究 成 果 報 告 書

1. 研究課題：現代アイルランド演劇研究
2. 研究期間：2007年 4月 4日 ～ 2008年 9月 11日
3. 研究場所(国/都市・機関名)：アイルランド共和国 ダブリン
University College Dublin

4. 研究成果概要(2,000字以内)：

特別研究期間中は、アイルランド国立大学の University College Dublin (UCD) の Faculty of Arts, School of English, Drama and Film において、客員研究員として、研究課題である現代アイルランド演劇の研究を進めた。このように、広範囲をカバーする課題を設定したのは、出発前から複数の研究テーマを抱えていたこと、また現地において、新しいテーマの広がりを感じていたという二つの理由による。UCDでは、かつて共同研究を行った、デクラン・カイバード教授、アントニー・ローチ教授、クリストファー・マレイ教授らと日常的に議論できる場に身を置くことができたのは、非常に有益な経験であった。(共同研究の成果は、論文集(*Ireland on Stage: Beckett and After, Dublin: Carysfort Press, 2007*)として、ダブリン滞在中に出版された。)劇作家でもあるフランク・マクギネス教授(Writer in Residence)の大学院のセミナーにゲストスピーカーとして参加し、マクギネス氏のみならず、大学院生たちと意見交換できたことは大きな収穫であった。

以下に活動内容を具体的に述べる。

研究発表・論文発表：

- (1) *McDonagh's Drama of Resilience: Japanese Reception of His Plays* というタイトルで、マーティン・マクドナーが日本でどのように受容されてきたか検討した。この論文は、Kevin J. Wetmore 編集による *Floating World/Emerald Isle: Japan as Site of Intercultural Irish Theatre*, (New York: Edwin Mellen Press, 2008, forthcoming) に収録予定。
- (2) *The Use of Curtains in Yeats's Early Plays* というタイトルで、イエイツの初期の作品、『キャスリーン伯爵夫人』(1889/1911)、『砂時計』[(散文：1903)、(韻文：1912/1914)]、『デアドラ』(1906.1907)におけるカーテンの使用について検討し、初期のイエイツの劇作を、アイルランド文芸復興の文脈ではなく、英国のヴィクトリア

トリア朝文化の文脈に位置づけようと試みた。イエイツは、40歳の誕生日に、友人たちからバーン・ジョーンズが挿絵を描いた稀観本『ケルムズコット・チョーサー』を贈られたが、その中の挿絵に描かれるカーテン、さらには、ウィリアム・ポールが推進したエリザベス朝演劇復興運動の上演形態がイエイツの初期の劇作品に与えた影響について検討した。この論文は、ISTR[Irish Society for Theatre Research]の年次大会で口頭発表を行った。(2008.4.4 at UCD, Blackrock)

- (3) Tom Murphy の『飢饉』 *Famine*(1964)について、上に述べたように、マクギネス教授の大学院セミナーで、ゲストスピーカーとして“*Famine in Context*”というタイトルで発表した。ここでは、19世紀半ばに起こったジャガイモ飢饉を扱った歴史劇としての『飢饉』が、執筆当時のアイルランドをどのように反映し、また、21世紀という現在にどのように関わりうるのか、という点について検討した。さらに、アイルランド演劇史における先行の劇作品を作品中で言及することによって、マーフィーがアイルランド演劇に関していかなる歴史観をもっていたか検討した。(2008.2.5) さらにこの論文を発展させ、国際アイルランド文学界(IASIL)の年次大会(於ポルト大学、ポルトガル)で口頭発表を行った。(2008.7.30)研究発表の際にフロアから寄せられた質問やコメントを考慮に入れ、さらに改訂した版は、クリス・マレイ教授編集による、マーフィーの生誕 75 周年を記念した論文集に収録の予定。(2010 年発行予定)

新しいテーマ、課題：

- (1) フランク・マクギネスと議論を重ねているうちに、彼の 2005 年の作品、*Speaking Like Magpies* が宮廷仮面劇の変形として論じられる可能性を見いだした。